

昨日のことを言えば鬼が泣く

仲村ゆうな

らすじ

脚本コンクールの授賞式で知り合った若い脚本家志望、山本大和と澤田絵夢。意気投合し一緒に映画を作ろうとするが、2020年、世界はコロナで一変した。撮影を断念し、それから二年、大和は疎遠になった絵夢に思いを馳せる。そしてある日目覚めると、目の前には絵夢の姿が。突然のことに戸惑う大和。さらには、マスクをつけて出かけようとする絵夢に不思議がられる。大和が目覚めたのは、コロナが流行しなかった世界線だった。コロナがなければ、大和と絵夢は交際し、同棲していたのだった。その日を境に大和はコロナの世界、コロナがない世界を行き来するようになる。

コロナの世界では制限がある中でも、同世代の映画監督が活躍していた。だが大和はというと、鳴かず飛ばず。それはコロナがない世界でも同じ。絵夢と共にくすぶっていた。また、コロナがない世界でも絵夢と映画を撮

ることは実現していなかった。その理由から、大和は絵夢が抱えていた事情を知ることになる。

次のコンクールでは結果を出すと意気込む絵夢。それを受け、これまでコロナを言い訳にしていた大和も次のコンクールでのにゆうしようをめざすことに。世界を行き来しながら作品作りに励む大和だったが思うように行かず絵夢と衝突するようになる。そして大和と絵夢は最終審査を突破。コロナのない世界で喜びを分かち合おうとするが、絵夢は突然家を出ていく。

コロナの世界に戻り、ついに授賞式当日。久しぶりに再会する絵夢の姿が。すると絵夢が結婚したことを知る。コロナのない世界での関係性を考え、複雑な気持ちになる大和。

今度はコロナがない世界で授賞式当日に目覚める。その授賞式の帰り道、大和は絵夢にプロポーズをする。だが、絵夢は地元に戻ることを決めていた。一緒に夢を追いかけてよう

と説得するが、どうにもならず、目覚めると
絵夢はいなかった。それから大和はコロナの
無い世界に行くことは無くなった。

一年後、大和は自身が監督を務めた映画を
公開する。映画館には絵夢が夫と訪れ、大和
の初監督作品を褒め称える。夢を諦め、幸せ
そうな絵夢の姿を見て、大和は未来への不安
と過去への後悔を抱えながらも、夢を追いか
け続けることを決めるのだった。

○ホテル・廊下

『第52回新人脚本家輩出コンクール
受賞者控室』の立て看板が置いてある。

○同・控室

名刺交換をしている人々。

山本大和やまもと (21)・澤田絵夢えむ (21)、向かい合う。

大和「初めまして」

絵夢「初めまして」

大和「山本です」

絵夢「澤田絵夢です」

大和・絵夢、名刺交換をする。

絵夢、受け取った名刺を見つめ、

絵夢「山本、大和さん」

大和「はい」

絵夢『『や』と『ま』がいっぱいですね』

大和『『と』もいっぱいありますよ』

大和、名刺を見て、

大和「澤田、えむさんでいいですか？」

絵夢「はい」

大和「え、本名ですか？」

絵夢「一応」

○同・宴会場

司会者「入賞は鈴木陽菜さん、『蜻蛉の歌』です」

壇上の鈴木陽菜(30)、花束を受け取る。

拍手が沸き起こる。

演壇に向かって拍手を送る大和。

× × ×

談笑する人々。

陽菜、たくさんの人に囲まれている。

離れたところで見ている大和・絵夢・

小林一郎(27)。

小林「やっぱ入賞に一番人が集まるよね」

大和「僕こういう授賞式とか初めてなんです

けどどう振る舞えばいいんですか？ 一応

名刺は作ってききましたけど」

小林「んー、まあ今日は映画会社の人とか来

てるから売り込みとか」

大和「売り込み」

小林「プロット見てもらうとかかな。まあ、

僕らみたいな最終選考に残っただけ組に声

かけて来る人は少ないけどね」

大和「へえ。そういう世界なんですネ」

ワインをごくごく飲む絵夢。

小林「君たち若いよね。学生？」

大和「はい。三年です」

絵夢「え、私も」

大和「マジですか」

小林「やっぱ将来映画監督目指してんの」

大和「まあ」

小林「君はさつきから結構飲んでるね」

絵夢「高そうなワインなんて滅多に飲めない

んだ」

○居酒屋・店内（夜）

掘りごたつ席に座る一同。

小林「だからさあ、あそこはヒロイン死なす

へきじゃないんだって」

べろべろに酔っぱらった様子の小林。

タバコを吸う島田頼仁(34)・国枝恵

(35)。

島田「そこは上島監督のメッセージがさあ」

陽菜「私もあれはヒロイン生きててほしかっ

たかな」

小林「ほら入賞が言ってるじゃないですかあ」

陽菜「苦笑いして」いやいや」

枝豆を食べている大和と絵夢。

恵「ほら、ヒートアップしすぎ。若いお二人

さんが萎縮しちゃってるから」

大和「あ、いえ、全然。気にせず」

頬杖をついて酒を飲む笹本洋二(33)。

笹本「鈴木さん今日何社から名刺もらった？」

陽菜「あ、なんかたくさんいた দিয়ে」

笹本「何年かぶりに入賞が女性だからね。注

目されたでしょ」

陽菜「そう、なんですかねえ」

笹本「いいよね、女性は。女性監督とか女性

脚本家とか、注目されるもんね」

島田「笹本さんだつて準入賞つてことでたくさん挨拶されたでしょ」

小林「僕ら賞もらえなかった組は相手にされませんでしたよ」

恵「そうそう。だからそんな卑屈にならない」

笹本「ふん」

笹本、酒を飲む。

大和「あ、あの僕来年就活なんですけど、やっぱりみなさん映画関係の仕事されてるんですか？」

恵「私は普通にスーパーのパートだよ」

小林「平日働いて週末映画撮ってる人もいますしね」

島田「でもチャンス掴みたいなら映像関係の仕事してる方が有利じゃないか？」

大和「なるほど」

絵夢「あの、やっぱ東京出た方がいいですか？」

恵「絵夢ちゃん地方だっけ？」

絵夢「山形です」

陽菜「え、そうなの？ 私出身秋田だよ」

絵夢「そうなんですか？」

陽菜「うん。笹本さんも確か東北でしたよね？」

笹本「……青森」

恵「えー！ そうなの？ 全然訛ってないよね？」

笹本「青森の人間がみんな訛ってると思わない
いでください」

島田「上京問題ねー」

小林「まあぶっちゃけ北海道でも沖縄でも書
けますからね」

島田「でもさあ、東京の脚本家と、沖縄の脚
本家、プロデューサーはどっちに声かける
と思う？」

恵「打ち合わせしやすい方だね」

陽菜「まあ東京出てきてもいいと思うよ。実

際私は出てきてよかったかな」

絵夢「遊ぶとこいっぱいありますもんね」

陽菜「そうそう」

小林「東北もいいと思うけどなあ」

笹本「都会の人間はそういうんですよ」

○繁華街（夜）

小林「国枝さん明日帰るんですか？」

恵「うん。朝一の便」

島田「フラフラじゃん、笹本くん」

笹本「（呂律回らず）まだ飲めます〜」

陽菜「絵夢ちゃん新宿のホテルだっけ？」

絵夢「はい」

陽菜「変な人についていけないでね」

大和「あ、俺方向一緒なんで途中まで」

絵夢「助かります。新宿迷路って聞いたんで」

笹本「みなさん！ 僕らが日本の映画界を支

えていきましようね！」

小林「笹本さん面白いなあ」

陽菜「悪い人ではないですよね」

恵「じゃあみなさん気を付けて！」

島田「またねー」

大和「お疲れ様でしたー」

○地下鉄・車内（夜）

名刺を眺める絵夢。

絵夢「いっぱいもらったなあ」

大和「誰がどれか分かんなくなりそう」

絵夢「あ、国枝さんてペンネームらしいです

よ」

大和「そうなの？」

絵夢「国枝は旧姓なんだって。旦那さん映画

監督だった」

大和「へー、すご」

絵夢「憧れるわー。私も言いたい。澤田絵夢

ってペンネームなんです」

大和「あはは」

絵夢「バカにしましたね？ 山本大和さん」

大和「してないよ」

絵夢「山本大和さんは本当に本名なんですた

っけ？」

大和「フルネーム呼びやめて。それに敬語じ

やなくていいよ。同い年なんだし」

絵夢「そっか、レアキャラだ」

大和「レアキャラ？」

絵夢「周りに同世代で脚本書く人とかいないからさあ。こつこついう場でも年上げつかだし」

大和「そういえば澤田さんは前もなんかで賞もらってたよね？ そのときも最年少だった？」

絵夢「あー、どうかな。そんなときは授賞式参加できなかったんだよね」

大和「そうなんだ」

○地下鉄駅・構内（夜）

大和、ふと映画の広告ビジョンが目にと留まる。

大和「鈴木さんの今回の作品って映画化するのかな」

絵夢「映画関係者の目に留まればそういうのもあるらしい」

大和「いいなあ」

絵夢「いいね」

大和「澤田さんは自分で映画撮ったりしない

の?」

絵夢「んー、しないかな。私監督じゃなくて脚本家になりたいんだ」

大和「そうなの?」

絵夢「映画一本作るのって何か月もかかるイメージなのね。でも脚本は一か月あれば書けるじゃん」

大和「俺二か月はかかる……」

絵夢「私の場合は一か月。そしたら一年で十
二本書けるじゃん。でも映画だったら年に
数本でしょ?」

大和「計算上は」

絵夢「そんなんしてたら人生足りないんだ。
私は死ぬまでに自分が書いた脚本全部映像
化したいから。書くだけ書いて監督に投げ
て、次の脚本書き始めてるのが理想」

大和「ほお……」

絵夢「だって資金集めとか現場とかめんどく
さそうじゃん?」

大和「うわあ……」

絵夢「ドン引いてるんじゃないよ。でもまあ、
自分が動かなきゃ脚本も文字のままなんだ
なつては思うけど」

大和「俺は今回書いた本、映画にするよ」

絵夢「マジで？」

大和「映画サークル入ってるから」

絵夢「うわ、いいなあ」

大和「夏までに就活終わらせて、夏休みの間
に撮る」

絵夢「えー、すご。できたら見せてよ」

大和「うん」

絵夢「あ、ここが言ってた出口？」

大和「あ、うん。こっから出たらホテル近い
と思う」

絵夢「ほんとにありがとう。お疲れ様でした」

大和「お疲れ様でした」

絵夢「じゃあまたいつかどこかで」

絵夢、階段を上る。

大和「……あの！」

絵夢、振り返る。

大和「映画、一緒に撮ってみない？」

絵夢「え？」

大和「夏休みさ、東京来れば？ サークルの撮影に参加してよ」

絵夢「えっと」

大和「映画ってこう作るんだってというのが分かれば……。いいかな、と」

絵夢、階段を下りて来る。

大和「映画作りって別に面倒なことだけじゃないよ」

絵夢「そうなんだ」

大和「そうなんです。だから、またいつかどこかでっていう曖昧な約束ではなく、来年の夏に……」

絵夢、吹き出して笑う。

絵夢「なんか映画の始まりみたい」

サラリーマン二人組が酔っぱらった様子で階段を下りて来る。

サラリーマン1「若者たちい！ セックスしてるかい？」

サラリーマン2 「少子化はんたいーい！」

ゲラゲラ笑って去っていくサラリーマンたち。

絵夢「最低な始まりだな」

大和「ノンフィクションなんで……」

絵夢「よし、就活頑張ろう」

大和「頑張ろう」

絵夢「じゃあまた、夏に東京で」

大和「また」

絵夢、階段を上っていく。

○街頭ビジョン

アナウンサー「新型コロナウイルスの感染が、

日本国内で初めて確認されました」

○家電量販店・店内

多数のテレビにニュース番組が流れている。

アナウンサー「緊急事態宣言が発令され」

○タクシー・車内

マスクを付けている運転手。

ラジオ「不要不急の外出は控えましょう。また、買い物の際はマスクをつけ、人ごみを避けましょう」

○アパート・部屋

スマホを見ている大和。

スマホには絵夢とのラインのトーク画面。

絵夢から、『またコロナが落ち着いたら』とメッセージが来ている。

大和、ため息をつく。

大和「いつだよ……」

○映像制作会社・社内

パソコンの画面には『2022年7月7日』と表示されている。

マスクをつけた大和(心)、入って来る。

大和「おはようございまーす」

コーヒーを飲んでいた遠藤千絵(33)、

マスクをつけて、

千絵「おはよー」

大和「あれ、千絵さん今日出社でしたっけ」

千絵「家だと捗らなくてさあ」

大和「在宅暇っすよねえ」

千絵「撮影ないの？ 私雑用でもなんでもや

るからさあ」

大和「あー、今日俺撮影ありますけど」

柴田蓮司(38)、大和のもとに向かって

くる。

柴田「山本ー、田中濃厚接触者だって」

山本「わー、まじですか」

千絵「あ、じゃあ私行くよ。ね、ね？」

柴田「千絵ちゃん現場好きだねえ」

千絵「よろしく山本」

大和「お願いします」

○道路

車内。

運転している大和。

助手席に乗る千絵。

大和「千絵さんよかったですか？」

千絵「何がー？」

大和「小さいお子さんいるっていうので事務方になったのに。こうして現場出て」

千絵「現場出ようが出まいがかかるときはかかるからねえ」

大和「そうですね」

千絵「それに今娘の幼稚園の方がやばいのよ。クラスターみたいになってさ」

大和「うわあ、大変ですね」

千絵「ちよつと減ったと思ったらまた増えるからね。キリないよ」

大和「いつになったら終わるんですかね」
千絵「ねえ」

○撮影スタジオ・玄関

機材を運ぶ大和と千絵。

千絵「でもさ、コロナになっていい面もある

よね」

大和「あります？」

千絵「会いたくない人もコロナを理由にでき
るじゃない。義実家とかそう。コロナ流行
ってるんで、とか言って二年帰ってない」

スタッフ「千絵さん、結婚に夢無くなるこ

とやめてくださいーい」

千絵「そんなもんなのよ、結婚で」

スタッフ「えー、まじっすか」

千絵「山本、はまだまだ先か。結婚」

大和「あー、そうっすね」

スタッフ「彼女いるんだっけ？」

千絵「こいつ遊んでるから」

スタッフ「いがーい」

大和「ちよ、俺のネガティブキャンペーンや
めてくださいよ」

スタッフ「遊んでるんだ」

大和「遊んでませんよ、コロナ怖いんで」

○ 駅・喫煙所（夜）

タバコを吸っている大和、スマホをいじっている。

スマホ画面には『一次審査通過作品』の文字。

スクロールしていく。

大きくため息をつく。

○映画館・館内（夜）

小さな劇場。

スクリーンを見つめる大和。

チラッと横を見ると、カップル。

手を繋いで見ている。

再びスクリーンに集中する大和。

○同・入り口前（夜）

看板のライトが消える。

ベンチに座っている大和・星野陽太

(24)。

女性、映画館から出てきて、

女性「あ、お疲れ様でしたー。面白かったで

す」

星野「ありがとうございます」

女性、歩いていく。

大和「すっかり星野監督ですね」

星野「まだ小さな劇場でしか流せないけどな

あ」

大和「いやでも立派だよ。星野は夢叶えて」

星野「こんなまだまだだ」

胡桃沢莉子(24)、出て来る。

星野「あ、莉子ちゃん」

莉子「あ、ここにいたー」

星野「見に来てくれてありがとう」

莉子「面白かったよ」

星野「どこが面白かった？」

莉子「うーん、宇宙人とキスするところ」

星野「あのシーンこだわったんだよね」

莉子「そっかあ。ね、また私も映画撮って

ね」

星野「うん！ 今考えてるのあるからさ」

莉子「えー、どんなの？」

星野「未知のウイルスにより離れ離れになっ

た男女のラブストーリー」

莉子「星野さんっぽくないね」

星野「ちょっと時代を反映させてみました」

莉子「楽しみにしてる。……大和くんも」

大和「え？」

莉子「スケジュール開けとくから。撮るとき

呼んで」

莉子、歩いていく。

星野「かわいいなあ……」

大和「……」

星野「山本映画撮らないの？ そろそろ俺の

撮影手伝うだけじゃなくて自分で監督すれ

ばいいじゃん」

大和「金ないし」

星野「俺だって金ない中でやってるよ。スタ

ッフだって大学のやつらに声かければいい

じゃん。俺も協力するよ」

大和「……コロナが落ち着いたらな」

○マンション・リビング(夜)

ベッドに寝転がっている大和。

スマホを見ている。

『一次審査通過作品』のページをスク

ロールする。

大和「いないか……」

大和、スマホを置き、電気を消す。

× × ×

朝になった。

ふと目を覚ます大和。

目の前には絵夢(24)が眠っている。

大和「……えっ！」

大和、飛び起きる。

絵夢「ん……」

大和「え、え、なにになになに」

絵夢、目を開ける。

絵夢「おはよ……。何、どうしたの」

大和「何！」

絵夢「はぁ？ 寝ぼけてんの？」

絵夢、目をこする。

大和「……澤田さん？」

絵夢「はい？」

大和「……何でいんの？」

絵夢「今日午後から出勤だもん」

大和「え、え？」

絵夢「大和くん今朝一現場じゃなかった？」

大和「……そうだ！」

○同・洗面所（朝）

手櫛しながら雑に歯磨きする大和。

大和「なにになになに」

○同・玄関（朝）

大和「もー、やばい」

絵夢「いってらっしゃーい」

大和「あ！ マスクマスク」

大和、慌てて収納棚を開ける。

絵夢「え？」

大和「え？」

絵夢「何、風邪でも引いた？」

大和「え？」

○撮影所・スタジオ

スタッフの声「台車通りまーす」

スタッフの声「弁当配つといてー」

マスクを付けずに働いているスタッフ
たち。

マスクをした大和、呆然と突っ立って
いる。

千絵「山本！そこ邪魔！」

大和「す、すみません！」

千絵「ほら手動かせ」

千絵、大和に段ボール箱を渡す。
マスクをしていない。

大和「あ、あの、マスクは？」

千絵「は？」

大和「いや何でみんなマスクしてないのかな

っし」

千絵「はあ？何、あんた風邪引いたの」

大和「いや違いますけど」

千絵「暑苦しいから取りなよ」

大和「いやコロナ怖いじゃないですか」

千絵「は？ 何それ？」

大和「え？」

千絵「コロナって何」

大和「……え？」

スタッフの声「千絵さん」

千絵「はいよー。じゃ、これよろしく」

千絵、駆けて行く。

○同・楽屋

歓談しながら弁当を食べる演者たち。

○同・喫煙所

大和、スマホを見る。

日付は『2022年7月7日』。

大和「なんで……」

大和、スマホで『コロナ』と検索する。

英語の学術誌などがヒットする。

大和「なんだよこれ……」

○繁華街（夜）

マスクをしていない人々が行き交う。

キョロキョロ見渡す大和。

大和「まじどういうことだよ……」

絵夢の声「大和くん！」

大和、ビクツとして振り返る。

絵夢、駆け寄って来る。

絵夢「お疲れ。ちょうど会ったね。じゃ行く」

大和「……どこに？」

絵夢「星野くんの映画。今日公開って言って

たじゃん。行ってやんないと」

大和「え、何で星野のこと知って……」

歩いていく絵夢。

慌てて後を追う大和。

○映画館・館内（夜）

並んで映画を見る大和と絵夢。

大和、チラッと絵夢を見る。

映画に集中している絵夢。

大和「……」

○同・入り口前（夜）

看板のライトが消える。

ベンチに座っている大和・絵夢・星野。

女性、映画館から出てきて、

女性「あ、お疲れ様でしたー。面白かったです」

星野「ありがとうございます」

女性、歩いていく。

絵夢「面白かったよ、星野監督。特にあの狼

男と宇宙人がポーカーするシーン」

星野「やっぱり？ 絵夢ちゃんは分かってくれるねー」

大和、絵夢と星野の様子をチラッと見る。

莉子、出て来る。

星野「あ、莉子ちゃん」

莉子「あ、ここにいたー」

星野「見に来てくれてありがとう」

莉子「面白かったよ」

星野「どこが面白かった？」

莉子「うーん、宇宙人とキスするところ」

星野「あのシーンこだわったんだよね」

莉子「そっかあ。ね、また私でも映画撮って
ね」

星野「うん！ 今考えてるのあるからさ」

莉子「えー、どんなの？」

星野「未知のウイルスにより離れ離れになっ
た男女のラブストーリー」

莉子「星野さんっぽいね」

星野「いつもの空で満載って感じ」

莉子「楽しみにしてる。……山本さんも」

大和「へ？」

莉子「もし映画撮るときは私にも声かけてく
ださいね」

大和「え、あ、はい……」

莉子「じゃあ」

星野「気を付けて帰ってねー」

莉子、歩いていく。

絵夢「今の何回か星野くんの映画に出てる子

だよね」

星野「めっちゃかわいい」

○マンション・リビング（夜）

大和、入って来る。

ベッドの上に寝転がっている絵夢。

大和、辺りをキョロキョロ見渡す。

絵夢「気づいて」何」

大和「あ、いやどこで寝ようかなくて」

絵夢「ベッドでしょ」

大和「え、いいの？」

絵夢「笑って）いいよ」

大和「……失礼します」

大和、恐る恐るベッドに寝転がる。

絵夢と肩が触れる。

大和「わ、ごめん」

絵夢「何、今日の大和くん変だよ」

大和「……うん」

絵夢、電気を消す。

大和、絵夢を見つめる。

絵夢「何、見つめてきて」

大和「いや、えっと……」

絵夢「……一次審査の結果見た？」

大和「え？」

絵夢「亀田フィルムの」

大和「あ、ああ……落ちてた」

絵夢「私の名前見つけた？」

大和「ううん……」

絵夢「だよね」

絵夢、寝返りを打つ。

絵夢「おやすみ」

大和「おやすみ……」

大和、目を閉じる。

× × ×

朝になった。

大和、目を覚ますと、目の前には莉子が眠っている。

大和「……うわ！」

ビクツとする莉子。

目を覚まして、

莉子「おはよー」

大和「な、なんで」

莉子「この前もらった合鍵で入っちゃった」

大和「ああ……」

大和、辺りを見渡す。

莉子「うん？」

大和「いや……」

○同・玄関（朝）

靴を履く大和。

莉子「あ、忘れてるよー」

莉子、大和にマスクを差し出す。

大和「あ……」

大和、マスクを受け取り、じっと見つめる。

莉子「うん？」

大和「……なんか、長い夢見たなって」

莉子、微笑んで大和にキスする。

莉子「（耳元で）また今度しようね」

○撮影スタジオ・スタジオ内

マスクを付けた人々が働いている。

○映像制作会社・社内

マスクをつけた大和、入って来る。

大和「戻りましたー」

マスクを付けている千絵。

千絵「お疲れ」

大和「お疲れ様です」

千絵「ねー、菊田陽性だって」

大和「あー、まじすか」

千絵「しょうがないねー」

大和「……コロナがなかったら」

千絵「そんなん考えても仕方ないでしょ。ほ

ら仕事仕事」

大和「……はい」

○居酒屋・店前（夜）

小林「お待たせー」

大和「お疲れ様です」

歩いてくるスーツ姿の小林(30)。

マスクを付けている。

大和「お久しぶりです。すみません急に」

小林「いやいや。俺も久々に飲みたかったから」

○同・店内(夜)

カウンターに並んで座る大和と小林。

間にはパーテーション。

小林「はい、乾杯」

大和「お疲れっす」

大和・小林、パーテーション越しに乾杯する。

小林「どう、最近は」

大和「鳴かず飛ばずです。この間も一次すら通らなかったし」

小林「亀田フィルム？俺も落ちた」

大和「今回は滑り込みで書いたって感じだったんですけどね」

小林「社会人になると時間使えないだろ」

大和「はい。うちなんて休日あるようでない
ですから」

小林「しょうがないしょうがない」

大和「まじみんなどうやってるんですかね」

小林「そういえば鈴木さんの名前あったな」

大和「ああ……。今回乗ってアンプロ問わず
でしたもんね」

小林「あのとときのメンバーの名前見つけると
嬉しい半分、焦り半分って感じだよなあ」

大和「……小林さん、澤田絵夢って覚えてま
すか？」

小林「ああ、大和と同年の子だろ。あの酒
飲みの」

大和「ああ、はい、そうです」

小林「あの子どもどうしてるかなあ」

大和「……どうしてますかね」

小林「連絡取ったりしてないの？」

大和「取って、ないです。なんか連絡先も消
えちゃってて」

小林「コンクールでも名前見ないし、書くの

辞めたんじゃない？」

大和「……辞めますかね」

小林「そういう人多いよ」

大和「(ほそっと) コロナがなければ……」

大和、ビールをグイッと飲む。

○マンション・リビング(夜)

ベッドに寝転がっている大和。

× × ×

朝になった。

目を覚ます大和。

隣には絵夢が眠っている。

大和「……」

× × ×

絵夢「今日さー、小林さん誘って飲み行かん？」

大和「え？ ああ、うん」

絵夢「じゃあ仕事終わったら連絡する」

絵夢、大和にキスする。

硬直する大和。

絵夢「いってきまーす」

絵夢、出て行く。

大和、唇に触れる。

大和「……え？」

○映像制作会社・社内

マスクを付けている大和、頬をつねる。

大和「……痛い」

千絵「何まだ風邪治んないの」

大和「……千絵さん。コロナって知ってます？」

千絵「何それ、お菓子？」

大和「……いえ」

千絵「それよりさー、山本の大学んときの友

達だっけ？　なんか映画公開されたって言

ってたじゃん。あれ見に行きたいんだけど」

大和「星野ですか」

千絵「どこでやってんの」

大和「あー、あれは……」

大和、ハツとする。

千絵「うん？」

大和「……ちよっとコンビニ行ってきます」

駆けだす大和。

千絵「はあ？」

○コンビニ・店内

制服姿で補充作業している星野。

星野「いらっしやいませー」

大和、駆けこんで来る。

大和「星野！」

星野「うわっ、ビビったあ」

大和「……やっぱりマスクしてない」

星野「何。お前仕事は？ またサボり？」

大和「なあ星野。……コロナって知ってる？」

星野「何それ」

○同・裏口

大和「なあ、この前言ってた新しい映画の企画って」

星野「ああ。未知のウイルスによって汚染された世界で離れ離れになった男女が」

大和「それってコロナのことだよね？」

星野「え、まさかのネタ被り？ もうそうい

う映画あった？」

大和「いや違くて」

星野「うわー。行けると思っただけだな。

感染が怖くてキスすらできなくなった世界

で最終的には人類に触角が生えてきて」

大和「星野、本当にコロナのこと分らない？」

星野「なんなんだよさつきからそれ」

大和「だって世界でコロナが流行ってて、み

んなマスク付けないといけなくて」

星野「山本……。俺は友達としてお前を全力
で殴る」

星野、大和をまっすぐ見つめ、

星野「葉、ダメ、絶対」

大和「違えよ！」

星野「ほんとどうしちやっただよ」

大和「だっておかしいんだよ。みんなマスク
付けてないし、俺は澤田さんと暮らしてる
し。……これ、夢じゃないよな？」

星野「はぁ？ 絵夢ちゃんはもうお前が二年
付き合ってる彼女だろうが」

大和「彼女？」

星野「絵夢ちゃんが上京してきてからずっと
一緒に住んでるじゃん」

大和「なんで……」

星野「出会は授賞式だったんだろ？」

大和「ああ……」

星野「あー、俺も彼女ほしい」

大和「じゃあ……映画、作ったのか？」

星野「え？」

大和「俺澤田さんと映画作ったんだよな？」

2020年の夏に！

星野「いや？ 知らないけど」

大和「え……」

星野「俺が絵夢ちゃんと知り合ったの絵夢ち
ゃんが上京してきてからだだったし」

大和「なんで……」

星野「なあ俺そろそろ戻らないと。すっげえ
ウンコ長い人だと思われる」

星野、裏口から入っていく。

○居酒屋・店内（夜）

賑わっている店内。

絵夢「お疲れーっす」

小林「お疲れー」

大和「お疲れ様です……」

乾杯する絵夢・小林・大和。

小林「いやー、さてさて。一次落ち反省会で
もしますか」

絵夢「やめてください、酒がまずくなる」

小林「結構自信あったんだけどな。大和は？」

大和「いや……」

絵夢「この人締め切りギリギリで出してたん
ですよ」

大和「それは……仕事で時間なかったし」

絵夢「アイデア出ないから書けなかったん
でしょ」

大和「……そっちだっって落ちたじゃん」

絵夢「……まあね」

小林「……そ、そういえば鈴木さんの名前あったな」

絵夢「ああ……。今回乗ってアマプロ問わずでしたもんね」

小林「あのときのメンバーの名前見つけると嬉しい半分、焦り半分って感じだよなあ」

絵夢「私は焦り全部です。私だけあの時から何も成長してないし」

小林「そんなことは」

絵夢「だって鈴木さんは注目の若手映画監督だし、笹本さんはこの前大賞取ってたし。」

島田さんも国枝さんもちよいちよい名前見かけるし」

小林「別に他人と比べる必要はないさ」

絵夢「……そうですけど」

○繁華街（夜）

少し間を開けて並んで歩く大和と絵夢。

絵夢「牛乳、無かったよね」

大和「あー、コンビニで買ってくか」

絵夢「コンビニ高いじゃん」

大和「いや無いって言うからさ」

絵夢「……」

大和「……」

二人の間に沈黙が流れる。

大和「……映画」

絵夢「はい？」

大和「映画、撮ってないんだね。2020年の夏」

絵夢「……うん」

大和「撮れたはずだよな？ だって（と口を

つぐむ）」

絵夢「……全部私のせいだよ」

大和「え？」

絵夢「ごめんね」

先に歩いていく絵夢。

大和「……」

○マンション・リビング（夜）

ベッドで眠っている大和と絵夢。

大和、ふと目を開け絵夢を見る。

背中を向け眠っている絵夢。

じつと絵夢を見つめる大和。

× × ×

朝になった。

大和、目を覚ます。

隣を見るが、誰もいない。

○公園

撮影機材を準備しているスタッフたち。

みんなマスクを付けている。

星野「みんな水分補給と塩分補給ねー」

スタッフたち「はい」

星野「休みなのにありがとな」

星野、大和にペットボトルを渡す。

大和「ありがと」

莉子の声「監督ー」

星野「はい」

星野、莉子のもとに駆け寄る。

日傘をさしている莉子。

大和、周りを見る。

準備をしながら雑談しているスタッフたち。

打ち合わせている星野と莉子。

大和「……」

○ファミレス・店内（夜）

向かい合って座っている大和と星野。

間にはパーテーションが置かれている。

ノートパソコンで作業している星野。

星野「で、山本はいつ映画撮んの？」

大和「……まあ」

星野「最後に撮ったのいつよ。四年は結局活

動できなかったから三年の学祭？」

大和「かな」

星野「お前と俺は趣味で終わらせないって言

ったじゃん」

大和「いやこの状況だとそんな簡単にいかな

いよ」

星野、頬杖をつく。

星野「お前いい加減コロナ言い訳にすんのか
めろよ」

大和「別に言い訳にしてるわけじゃ」

星野「せめて脚本の方頑張れば？ コンペと
かないわけ？」

大和「……仕事で時間取れないし」

星野「へー、そう」

星野、作業を再開する。

大和、スマホを見る。

○コンビニ前（夜）

タバコを吸う大和。

莉子、コンビニから出て来る。

莉子「お疲れ様」

大和「タバコの火を消して」お疲れ」

莉子「やなことあったんでしょ」

大和「別に」

莉子、大和の腕にすり寄る。

莉子「いーよー。私タバコの匂い好きだし」

大和、莉子の手を握る。

莉子「行く」

大和・莉子、手を繋いで歩く。

莉子「今日の撮影暑かったね。疲れちゃった」

大和「うん」

莉子「息抜きしよ」

○マンション・リビング（夜）

ベッドで抱き合う大和と莉子。

何回もキスを交わす。

莉子「濃厚接触なっちゃうね」

莉子、大和にキスする。

大和「……俺のどこが好きなの？」

莉子「吹き出して」何それ」

大和「いや嘘冗談」

大和、うつぶせになる。

莉子、大和の上に覆いかぶさる。

大和「わ」

莉子「一緒にいて安心できるとこだよ」

莉子、大和の耳にキスする。

× × ×

朝になった。

大和、目を覚ますと隣には誰もいない。

絵夢の声「起きて起きて！」

ビクツとする大和。

絵夢「歯磨きをしながら」星野くんの撮影手

伝いに行くんでしょ」

大和「あ、ああ……」

○公園

撮影機材を準備している人々。

マスクは付けていない。

星野「みんな水分補給と塩分補給ね」

スタッフたち「はい」

星野「休みなのにありがとうな」

星野、大和と絵夢にペットボトルを渡す。

絵夢「ありがとう」

莉子の声「監督」

星野「はい」

星野、莉子のもとに駆け寄る。

日傘をさしている莉子。

絵夢「すっかり星野くんのお気に入りで女優だ

ハハ」

大和「へ？ あ、ああそうだね」

○ファミレス・店内（夜）

ノートパソコンで作業している星野。

星野「で、二人はいつ映画撮んの？」

大和「あー……」

絵夢「撮れたらいいよね」

星野「いいよねじゃなくて」

絵夢「（ふざけて）ねー」

星野「二人はさー、コンクールでいいところ行

ってるんだしもつたいないよ。自分で映像

化すればいいじゃん」

絵夢「そんなことも考えたよ」

星野「いいじゃん。なんでやんなかったの」

絵夢「いろいろあったのよ」

星野「いろいろって？」

絵夢「私の地元ど田舎でさー。で、実家も保

守的で。女は家守的かな考えなの。んで家にいる年寄りの世話とか私やってきたわけ」

大和「え……」

絵夢「脚本家なんて応援してもらえないの分かってたから秘密にしてて。でまあ三年の時賞取って、なんとかごまかして授賞式出て大和くんと出会って……」

絵夢、大和をチラッと見る。

絵夢「四年の夏休み東京出てこようとしたけど親大反対で。映画製作計画はおじゃん」

大和「……」

星野「絵夢ちゃんもいろいろ大変なんだな」

絵夢「就職もちろん地元でってなってる卒業と同時に縁切って晴れて上京してき
たって感じ？」

星野「じゃあ今は晴れて自由の身だ？」

絵夢「ウケる」

星野「じゃあ今は晴れて自由の身だ」

絵夢、大和の肩を組む。

絵夢「大和くんのおかげだね」

星野「じゃあ今度こそ二人で撮ればいいじゃん」

絵夢「お金があればね。お先真つ暗のフリーターの身ですから」

星野「そんな未来のこと考えても仕方ないじゃん」

○コンビニ前（夜）

タバコを吸う大和。

絵夢、コンビニから出て来る。

絵夢「アイス差し出し」はい」

大和「ありがとう」

絵夢「禁煙しろ。タバコの匂いきらい」

歩き出す絵夢。

大和、慌ててタバコの火を消しあとを追う。

○住宅街（夜）

アイスを食べながら並んで歩く大和と絵夢。

絵夢「そろそろさー、輩出コンクールの応募

要項出るころじゃん？」

大和「あー、うん」

絵夢「私今度こそ本気出すわ。もう言い訳し

ない」

大和「……そう」

絵夢「頑張るわ。あのとき取れなかった賞狙

いで」

大和「……分かった」

○マンション・リビング（夜）

ベッドに並んで寝ている大和と絵夢。

大和「……ねえ」

絵夢「うん？」

大和「……俺も頑張るわ」

絵夢「……うん」

× × ×

朝になった。

ベッドの上で目覚める莉子。

テーブルでノートパソコンを開いてい

る大和。

タイピング音が部屋に響く。

莉子、起き上がり大和の背中に抱き着く。

大和「うおっ」

莉子「監督ー。新作？」

莉子、大和の耳に噛みつく。

大和「ちよ、やめてよ」

大和、莉子を払いのける。

莉子「くすぐったかった？」

大和「……しばらく家来ないでくれない？」

莉子「……は？」

大和「次のコンクール、本気でやりたいんだ。

だから」

莉子「私が邪魔ってこと？」

大和「……今は集中したい時だから」

莉子「別に私と会いながらもよくない？」

大和「莉子もさ、演技に集中した方がいいん

じゃない？ この前もオーディション落ち

たって言ってたじゃん」

莉子「……何、急に上から目線」

大和「そんなつもりは」

莉子「私だって努力してる！ 本当はアメリ

カ留学するつもりだったし。コロナのせい

で……」

莉子、乱雑に荷造りする。

莉子「帰るよ」

莉子、玄関に向かう。

慌ててあとを追う大和。

○同・玄関（朝）

莉子「さっきなんかしばらくって言ってたけ

ど、もう来ないから」

大和「いやそこまでは」

莉子「ダッサ」

莉子、出て行く。

○撮影スタジオ・裏口

大和、弁当を食べながらメモ帳に書き

込んでいる。

ドアが開き千絵、出て来る。

千絵「わ、ここで食ってたの？」

大和「お疲れ様です」

千絵「(メモを覗き込んで) なになに」

大和「いやちよっと」

千絵「何企画でも練ってるわけ？」

大和「まあ、はい」

千絵「へえ。急にやる気になっちゃって」

大和「うっす」

千絵「女にケツでも叩かれたか？」

大和「(苦笑いして) うっす」

○ファミレス・店内(夜)

向かい合って座っている大和と星野。

二人の間にはパーテーション。

タブレットを見つめる星野。

大和「……ど？」

星野「うーん。登場人物の性格が弱いかなあ。
いまいち共感できない」

星野、タブレットを大和に渡す。

大和「そうか……」

星野「一回設定考え直すとか」

大和「分かった」

大和、メモを取る。

星野「大学の時みたいだな」

大和「え？」

星野「山本が真剣に取り組んでる。そっちの

方が俺好きだよ」

大和「星野……。キモ」

星野「なんでだよ！ ていうか俺のおかげだ

ろ？ 俺がはっぱかけたからだろ？」

大和「違うかな」

星野「じゃあ何だよ」

大和「……星野はさ、コロナがなかったらっ

て考えたことある？」

星野「そんな過去のこと考えても仕方ないじ

ゃん」

大和「……俺、実はときどきコロナがない世

界に行くんだ」

星野「……うん」

大和「向こうではなんの制限もなくて、コロナが無かったらこんなことになってたのになって……」

星野「山本……。俺は友達としてお前を全力で殴る」

星野、大和をまっすぐ見つめ、

星野「葉、ダメ、絶対」

大和「違えよ！」

星野「ほんとどうしちやっただよ」

大和「……じゃあ作品のネタとして聞いて。

主人公の男がある日目覚めたらコロナが流
行らなかった世界になってるんだ」

星野「何のために？」

大和「え？」

星野「何のために主人公はコロナが無い世界
に行くの？」

大和「それは……何でだろう」

星野「そこがはっきりしないとさあ」

大和「うん……」

星野「あ、じゃあこういうのは？ コロナ禍

で遠距離になって別れた彼女を取り戻す」

大和「ああ……」

星野「で、実はその彼女が宇宙人で地球から

男を連れ出して」

大和「却下」

星野「面白そう……。共作する？」

○マンション・リビング（夜）

ノートパソコンに向かっている大和。

タイピングしていた手が止まる。

大和「……あー！ 無理！」

大和、床に寝転ぶ。

大和「舌打ちして）クソつまんねえ」

× × ×

朝になった。

キーボードを叩く音が部屋に響く。

床で眠っていた大和、目を覚ます。

大和「背中痛……」

ノートパソコンに向かっていている絵夢。

大和「おはよ」

絵夢「(パソコンに目をやったまま) おはよ」

× × ×

ノートパソコンに向かってしている大和と

絵夢。

大和の手が止まる。

大和「どんなの書いてんの」

絵夢「あー……、うん」

キーボードを叩き続ける絵夢。

大和「……聞いてないなら返事するなよ」

絵夢「ため息をついて」大和くんはいいよね。

今回ダメでもいくらでもチャンスあるんだ

から」

大和「は？」

絵夢「仕事の関係でコネでも何でもあるでし

よ」

大和「いや俺下っ端だし、そんなんあるわけ

ないじゃん。だったら今頃……。ていうか

そんなん言うならそっちだって映画関係の

とこ就職すればよかったじゃん」

絵夢「はあ？ 今更言っても仕方なくない？」

大和「だったらそっちだって言うなよ」

絵夢「だって私は……仕方ないじゃん」

大和「言い訳ばっか」

絵夢、立ち上がる。

絵夢「出てくわ」

大和「え？」

絵夢「しばらく帰らないから」

大和「ちよ、どこ行くの」

絵夢「ネカフエ」

絵夢、玄関に向かう。

大和「ねえ」

絵夢の声「宿泊パック取るから！」

ドアの閉まる音。

大和、大きくため息をつく。

タバコの箱を手取る。

が、中身は空。

○コンビニ・店前（夜）

コンビニから出て来る大和。

タバコに火をつける。

タバコを吸い、深く煙を吐く。

莉子の声「山本さん？」

ビクツとする大和。

莉子、駆け寄って来る。

莉子「わー、偶然ー」

大和「こ、こんばんは」

莉子「あれー？ おうちこの近くなんです

か？ 私は撮影の帰りで」

大和「あ、そうっすか」

莉子「ねえ、駆ってどっち方面でしたっけ」

大和「あー……」

○住宅街（夜）

並んで歩く大和と莉子。

莉子「山本さんは映画撮らないんですか？」

大和「あー、うん……」

莉子「撮るとき絶対私主演にしてください

ね？」

大和「あ、あはは」

莉子「私、演技の勉強しに留学するつもりな

んです。だからその前に山本さんの映画出
たいなあ」

大和「いつぐらい?」

莉子「んー、まあちよこちよこお仕事もらっ
てるからそれ落ち着いてから?」

大和「へえ……」

莉子「なんかおすすめの映画とかないです
か? 勉強のためにいろいろ見たくて」

大和「あー、洋画とか?」

莉子「DVDとか持ってないですか?」

莉子、大和を見つめ微笑む。

大和「……持ってます」

○マンション・リビング(夜)

大和・莉子、入って来る。

莉子「お邪魔しまーす」

大和「すぐ探すんで」

大和、ラックを探る。

莉子、大和の隣にしゃがむ。

莉子「ゆっくりでもいいですよ」

莉子、大和をじっと見つめる。

大和、慌てて目をそらす。

大和「あ、あれ、どこいったっけな」

莉子「彼女さん今日いないんですね」

大和「あ、あー、まあ」

莉子「今日帰ってこないんですか？」

大和「はい」

莉子「へえ」

大和「……ごめんなさい、やっぱりアマプラで
見てもらって——」

莉子、大和に顔を近づける。

大和「うわ！」

大和、莉子から離れる。

莉子「え？」

大和「え」

莉子、大和の肩に持たれる。

大和「いやいやいや」

大和、莉子の肩を抱き離れさせる。

莉子「なんですか」

大和「あの、その、キス、しようと思いました？」

莉子「はい。するので口閉じてください」

大和「いやいやいや」

莉子「最初から口開けたのがいいですか？」

大和「いや、その、なんか、キスとかそういう

うのは濃厚接触になっちゃうというか」

莉子「(クスッと笑って)官能的な表現ですね」

莉子、大和の頬にキスする。

莉子「この先ダメなんですか？　なんか私た

ち相性いい気がするんですけど」

大和「いや相性はいいんですけど」

莉子、大和を押し倒す。

莉子「息抜きしましょ」

莉子、大和のズボンに手をかける。

大和、目を瞑る。

大和「――だ、だめです！」

莉子「え？」

大和「……だめです。俺、今集中したいとき

なんで。誘惑に勝たないといけないんで」

莉子「ダッサ」

莉子、身なりを整え、玄関に向かう。

勢いよくドアが閉まる音。

大和「……ばかやろう」

大和、スマホを手に取り電話をかける。

大和「電話が繋がって……ごめん」

絵夢（電話）「別に謝るようなことしてないじ

ゃん」

大和「俺、授賞式でまた絵夢に会いたい」

絵夢（電話）「いや、別にどこでも会えるじゃ

ん」

大和「……うん。そうだね」

絵夢（電話）「変なの」

大和「絵夢も、書いてるよね？」

絵夢（電話）「……うん。でもときどき新世界
に旅出てる」

大和「笑って」帰っておいで」

絵夢（電話）「うん」

× × ×

朝になった。

ベッドの上で目を覚ます大和。

玄関の方を見る。

大和「……」

○コンビニ・裏口

マスクを付けている星野、タブレット
を見ている。

横目でチラチラ星野を見る大和。

星野「……うん。だいぶよくなったんじゃないな

い？」

大和「まじ？ よかった……」

星野「山本はもともと面白いもの書くんだけ

ら。あとは細かい設定を詰めること」

大和「うん……。分かった。ありがとう」

星野「山本が俺の意見素直に聞いている……」

大和「藁をもすがる思いなんだよ」

星野「誰が藁じゃい」

大和「……この前のさ、コロナの世界とコロ

ナのない世界を行き来する話だけど」

星野「うん」

大和「どうしてコロナのない世界に行くのか
っていうと、コロナのせいで遠く離れた人

ともう一度夢を追いかけたかったから、だ
と思う。なんかよく分かんないけど神様が
くれたボーナスステージ的な」

星野「ほおん。山本にしては珍しいSF映画だ
な」

大和「かな」

星野「今回のそれで書けばよかったじゃん」

大和「うーん」

星野「じゃあ次回でだな」

大和「結末次第かな」

○映像制作会社・喫煙所

大和、スマホを見ている。

画面には『一次審査通過作品』のペ
ージ。

『山本大和』の文字を見つける。

大和「……よっしゃ！」

大和、大きくガッツポーズする。

大和「よっし、よっし……」

大和、画面をスクロールする。

大和「あ……」

画面には『澤田絵夢』の文字。

○居酒屋・店内（夜）

カウンターに並んで座る大和と小林。

パーティーション越しに乾杯する。

小林「おめでとう」

大和「ありがとうございます」

乾杯する大和と小林。

大和「まだ一次ですけどね」

小林「いやいや立派なもんだよ。俺は一次す

らダメだったからね」

大和「また次ですね」

小林「……いや俺辞めるんだ」

大和「え」

小林「コンクールはもう卒業。脚本はもう書

かない」

大和「え、何ですか」

小林「実家がさ、田舎で定食屋やってたんだ

けど、コロナで客来なくなって店畳むこと

にしたんだよね。んで一緒に暮らすことになつてさ」

大和「大変すね」

小林「それでいろいろ覚悟決めなきゃいけないし、今のままだと全部中途半端になるから。最初から決めてたんだ。今回がダメだったらきっぱりやめようって」

大和「……いいんですかそれで」

小林「笑って）よくねーよ」

大和「書き続ければいいじゃないですか。何も全くやめなくても」

小林「俺さ、日頃の鬱憤とかを作品に落とし込んで、そうやってれば生きてけるって感じだったんだけど、別に書かなくても生きていったんだよ。スマホゲームでも酒でも。俺はそれで生きていけるんだ。そういう、普通の人間だったってわけ」

大和「小林さん才能ありますよ」

小林「俺くらい書けるのなんていくらでもいるよ」

大和「もったいないじゃないですか」

小林「やっとき、終われるんだよ。毎回毎回

正解も分からず書いてたのがやっとき」

○同・店前（夜）

大和・小林、出て来る。

大和「ごちそうさまです」

小林「まあお祝いつてことで」

大和「……小林さん本当にやめるんですか」

小林「うん。あ、でも何年後かに俺の名前見

つけても何も言わないでね」

大和「くっそ責めますよ」

小林「お手柔らかに」

小林、笑って、

小林「ただの素人が卒業だなんだってな」

大和「ほんとうつすよ」

小林「大和は頑張れよ。夢を追うのは若者の

特権だからな」

大和「うっす」

小林「俺の夢はここで終わり」

大和「……小林さんの書く本、好きでしたよ」

小林「ありがとうございます」

小林、歩き出す。

小林「入賞取れよー」

大和、小林の背中を見送る。

○マンション・リビング（朝）

大和、目覚めると、隣に絵夢が眠っている。
いる。

大和「……おめでどう」

× × ×

メイクをしている絵夢。

大和「……コンクールの結果さあ」

絵夢「……うん」

大和「そろそろ出るんじゃない？」

絵夢「あー、かもね」

大和「うん。今日夜小林さん誘って飲みかい
ない？」

絵夢「おー、いいねえ」

○コンビニ・裏口

並んでタバコを吸う大和と星野。

星野「一次通過おめでとう」

大和「星野監督のおかげだよ」

星野「絵夢ちゃんもよかったな」

大和「ああ、うん」

星野「今日はお祝いだな」

大和「(笑って) まだ一次だよ」

星野「そういえばこの前話した未知のウイルスストーリーなんてだけさ」

大和「あー、うん」

星野「あれ、ウイルスが蔓延してる世界線と流行しなかった世界線を行き来するパラレルワールドものにしても面白いかなと思って」

大和「あ、ああ、そうだね」

星野「ウイルスのせいで遠距離になって別れた彼女を取り戻しに違う世界線に行くんだけど、実はその彼女が宇宙人で地球から男を連れ出して」

大和「はいはい」

星野「でもなー、ラストがなー。別に違う世界線で彼女と幸せになったとしても意味ないからなー」

大和「意味ないことはないんじゃない？もしかしたらもとの世界線でも彼女に出会えるかもしれないだし」

星野「その設定にしたらラストハッピーエンドでいけるな！面白そう……。共作する？」

○繁華街（夜）

スマホの着信音。

大和、電話に出て、

大和「もしもし？ 今日さー、何食べたい？」

絵夢（電話）「ごめん今日行けなくなった」

大和「え？ 何で？」

絵夢（電話）「なんか、いろいろ」

大和「ん？ そう。分かった」

絵夢（電話）「バイバイ」

○居酒屋・店内（夜）

小林「おめでどう」

大和「ありがとうございます」

乾杯する大和と小林。

大和「まだ一次ですけどね」

小林「いやいや立派なもんだよ。俺は一次すらダメだったからね」

大和「……」

小林「次頑張るかー」

大和「え……」

小林「シナリオ教室とか通おうかな」

大和「次、次も書きますか？」

大和、小林に詰め寄る。

小林「え？ うん、まあ書くけど」

大和「本当に？」

小林「うん」

大和、泣き出す。

小林「え？ え？」

小林、大和の背中を擦る。

小林「酔った？」

テーブルに突っ伏して泣く大和。

○同・店前（夜）

大和・小林、出て来る。

大和「ごちそうさまです」

小林「まあお祝いつてことで」

大和「ありがとうございます」

小林「絵夢にもおめでとうつて伝えといて」

大和「……はい」

小林、大和の肩を叩き、

小林「夢を追うのは若者の特権だからな」

大和「小林さんもまだ若いじゃないですか」

小林「もう30だったの」

小林、歩き出す。

小林「入賞取れよー」

大和、小林の背中を見送る。

○マンション・リビング（夜）

大和、入って来る。

部屋の電気を付ける。

大和「ただいまー？」

しんとしている部屋。

大和、首を傾げる。

× × ×

朝になった。

大和、起き上がる。

周囲を見渡すが誰もいない。

○住宅街（朝）

マスクを付けている大和、歩いている。

マスクを付けていない人とすれ違う。

大和、「あれ？」と首をかしげる。

○撮影スタジオ・裏口

大和、電話をかけている。

が、一向に繋がらない。

マスクを付けていない千絵、大和に向

かって、

千絵「山本——！」

大和「はい！」

大和、スマホをポケットにしまい千絵に駆け寄る。

○ファミレス・店内（夜）

ボックス席に座っている大和、スマホを見ている。

マスクを付けている星野、入って来る。

星野「お疲れー」

大和「ああ、お疲れ」

星野、席に着く。

星野「よかったな、二次も突破して」

大和「久々に二次まで通ったよ」

星野「やっぱスーパーアドバイザーがいたからだな」

大和「ありがとうございます。何でも好きなものお頼みください」

大和、星野にメニュー表を渡す。

星野「どれどれ」

大和、スマホ画面を見る。

『二次審査通過作品』のページ。

『澤田絵夢』の文字がある。

星野「じゃあこのページからこのページまで」

○マンション・リビング（朝）

大和、目覚める。

隣を見るが誰もいない。

○街中

マスクを付けた人々が行き交う。

○映像制作会社・喫煙所

マスクをつけた大和、タバコに火をつけ、吸おうとする。

が、マスクをしたままに気づき、慌ててマスクを取る。

スマホを取り出し、操作する。

画面には『最終選考通過作品』のページ。

『山本大和』のほか、『澤田絵夢』の文

字もある。

メール画面を開くと、『入賞者には事務局から電話連絡をします』と記載されている。

タバコを深く吸う大和。

咽ていると、電話が鳴る。

大和、深呼吸し、電話に出る。

大和「はい、山本です。はい、山本大和です

……準入賞、ですか。あ、いえ、ありがとうございます！」

○デパート・食品フロア（夜）

歩いている大和。

ふと足を止め、デパートに入る。

○デパート・食品フロア（夜）

マスクを付けた客がまばらにいる。

ケーキのショーケースを眺める大和。

ショーケースにはケーキが数少ない。

大和の前には客1・2が並んでいる。

客1「んー、ホールでいいか？」

客2「えー、多いよお」

客1「でも残ってるの全然ないじゃん」

客2「ホールにする？」

大和、チラチラ前の客1・2を見る。

客1「じゃあー、チーズケーキとショートケ

ーキ一個ずつで」

眉をしかめる大和。

店員「次にお待ちのお客様、お決まりでした

らお伺いします」

大和「あー、じゃあ一番小さいホールケーキ

で……」

○マンション・リビング（夜）

大和、ホールケーキを食べている。

大和「やっぱ多いな」

大和、ケーキにラップをかける。

床に寝転び腹を擦る。

× × ×

ベッドの上で目覚める大和。

隣には絵夢が眠っている。

大和、絵夢の頬を撫でる。

絵夢「ん？ 何？」

大和「あ、ごめん起こした」

絵夢、大和の手に頬をすり寄せる。

大和「……俺のどこが好きなの？」

絵夢「吹き出して、何それ」

大和「いや嘘冗談」

絵夢「一緒にいてがんばろって思えるところ

だよ」

大和「……俺も頑張ろうって思えるよ」

絵夢「大和くんは？」

大和「え？」

絵夢「私のどこが好きなの？」

大和「……絵夢が俺の名前を呼んだ時。その

ときからなんかこの子かわいいなって」

絵夢「ええ？」

大和「だから、付き合ったんだと思う」

絵夢「ウケる」

○映像制作会社・喫煙所

スマホの着信音。

大和、電話に出て、

大和「はい、山本大和です。……はい、ありがとうございます」

○デパート・食品フロア（夜）

ケーキのショーケースを眺める大和。

ショーケースにはケーキが数少ない。

大和の前には客1・2が並んでいる。

客1「んー、ホールでいいか？」

客2「えー、多いよお」

客1「でも残ってるの全然ないじゃん」

客2「ホールにする？」

大和、チラチラ前の客を見る。

客「じゃあ、チーズケーキとショートケーキ

一個ずつで」

ホッとする大和。

店員「次にお待ちのお客様、お決まりでしたらお伺いします」

大和「ホールケーキください！」

○マンション・玄関（夕）

ケーキ箱を持っている大和、入って来る。

○同・リビング（夕）

大和、入って来る。

大和「ただいまー」

絵夢「おかえり」

絵夢、スーツケースに荷物を詰めていく。

大和「え、何してんの？」

絵夢「ちよつと実家帰るわ」

大和「え、なんで」

絵夢「いろいろと」

絵夢、出て行くこうとする。

大和「ちよつと待って！」

大和、絵夢の腕を掴んで止める。

大和「……俺準入賞」

絵夢「……おめでとう。じゃあ授賞式でね」

大和「絵夢は？」

絵夢「……賞なし」

絵夢、出て行く。

ケーキ箱を持ったまま突っ立つ大和。

○同・洗面所（朝）

スーツ姿の大和、鏡の前でマスクを外す。

髭そりを取り出し、髭を剃る。

○ホテル・廊下

『第55回新人脚本家輩出コンクール

受賞者控室』の立て看板が置いてある。

○ホテル・控室

大和、入ってくる。

キョロキョロ見渡す。

名刺交換をする人々。

みんなマスクを付けている。

絵夢の声「初めまして、澤田絵夢です」

ハッとする大和。

女性と名刺交換をしている絵夢の後ろ姿。

大和、絵夢の元に向かう。

女性「澤田絵夢さん」

絵夢「はい」

女性「本名ですか？」

絵夢「一応、ペンネームです」

立ち止まる大和。

絵夢「澤田って旧姓なんです」

女性「へー、じゃあ絵夢は本名？　かわいら

しいですね」

絵夢「いやいや……」

女性、ふと大和に気づく。

絵夢、女性の目線に気づき、振り返る。

向かい合う絵夢と大和。

絵夢「あ……。山本大和さん？　お久しぶりです」

大和「あ……。お久しぶりです」

絵夢「あ、覚えてます？ 私前にこのコンク

ールで会った、澤田絵夢です」

大和「……はい、覚えてます」

絵夢「お久しぶりです。この度は準入賞、お
めでとうございます」

大和「ありがとうございます」

○同・宴会場

カメラマン「じゃあ一回マスク外しましょう
か」

大和「あ、はい」

大和、マスクを外す。

カメラマン「じゃあ撮りますよー」

花東と賞状を手にした大和、緊張気味
の笑顔で突っ立つ。

× × ×

談笑している人々。

人数は少ない。

男性「いやあ、本当だったらうちの若手も連
れて来たかったんですけどねえ」

大和「へえ」

男性、会場を見渡して、

男性「やっぱコロナのせいで例年より映画会
社からも人来てないですね。はずれの年に
受賞しちゃいましたね！」

大和「あはは……」

大和、チラッと絵夢の方を見る。

他の最終選考者たちと談笑している絵
夢。

左手薬指には指輪。

大和「……」

○同・控室

男「えー、皆様。授賞式お疲れ様でございま
した。本来でしたら打ち上げ、といきたいと
ころですが今般のコロナウイルスの状況も
ありまして残念ながらなし、ということだ

花束を手を持っている大和。

花を突いてみる。

男の声「お疲れ様でしたー」

女の声「お疲れ様でしたー」

絵夢の声「山本さん」

大和、ハツとして振り返る。

絵夢が立っている。

絵夢「あの、私、今日新宿のホテル取ってるんですけど、あの、新宿って、迷路じゃないですか。なので」

大和「……俺方向一緒なんで途中まで」

絵夢「すみません、ありがとうございます」

○地下鉄・車内（夕）

絵夢「えー、じゃあいま映像制作の会社に？」

大和「はい」

絵夢「えー、すごい」

大和「絵夢、澤田さんは何を？」

絵夢「(笑って) 英語式で呼ばれた。私は市役所です」

大和「公務員ですか。すごいですね」

絵夢「いえ全然です」

大和「……脚本も続けてたんですね」

絵夢「まあ趣味程度に？ やっぱ社会人なると全く時間取れないですね。学生の時は好きにだけ書けたのになあ」

○地下鉄駅・構内（夕）

並んで歩く大和と絵夢。

絵夢「すみません、出口まで教えてもらって」

大和「いえ。こっちの方、全然来ないでしょ？」

絵夢「はい。前の授賞式ぶり、だから三年前

くらい？ コロナの前だから」

大和「……ですよね」

絵夢「コロナが無かったら東京来てたはずなんですけどね。2020年の夏」

大和「……はい」

絵夢「山本さんは映画撮ったんですか？」

大和「いえ……。大学も、封鎖されてたし」

絵夢「あー、そっかあ。どこもそんなんでし

たね」

大和「撮りたかった、ですね」

絵夢「……はい」

大和「コロナだから仕方なかったですけどね」

絵夢「……実家に祖母がいて。高齢なので家

族も神経使ってて」

大和「……はい」

絵夢「それで外出とかあんまり……。って言

い訳ですね」

大和「そんな、仕方ないことじゃないですか」

絵夢「コロナ禍でも活動してる人たち見ると、

自分なんて言い訳ばっかだなって」

大和「そんなこと、ないですよ」

絵夢「めっちゃフォローしてくれますね」

大和「いや、俺も気持ち分かるんで」

絵夢「優しい人ですね」

大和「そんなことないです」

絵夢「優しい人いいと思いますよ」

絵夢、耳に髪をかける。

大和、絵夢の指輪が目に入る。

大和「旦那さん優しい人ですか」

絵夢「はい」

大和「いつ結婚したんですか」

絵夢「今年の六月です」

大和「新婚じゃないですか」

絵夢「まあ一応」

大和「旦那さん映画監督ですか」

絵夢「(笑って) 違います」

大和「じゃあ脚本家ですか」

絵夢「違います。旦那はそういうのじゃない

です。ただの公務員です」

大和「脚本家志望とか？」

絵夢「いえ、彼は脚本の読み方も分からない

です。あ、でも映画は好きですね」

大和「どうして結婚したんですか？」

絵夢「……一緒にいて安心するからですかね」

大和「……大事ですね」

絵夢「あ、ここですか」

絵夢、出口の前で立ち止まる。

大和「あ、はい。ここから出たら一番近いと

思います」

絵夢「本当にありがとうございました。お疲れ様でした」

大和「お疲れ様でした」

絵夢「じゃあ」

絵夢、階段を上ろうとする。

大和「あの！」

絵夢、立ち止まる。

大和、花束を差し出す。

大和「これ、いりますか？」

絵夢「あ、いえ、大丈夫です」

大和「結婚おめでとうございます的な」

絵夢「それで言ったら準入賞おめでとう的な

のじゃないですか」

大和「花とかよく分かんないんで」

絵夢「もらっといた方がいいですよ。あの、

私明日移動ですし」

大和「あ、そっか。邪魔ですよね」

絵夢「おめでとうございました」

大和「ありがとうございます」

絵夢「じゃあ」

大和「また」

大和、絵夢を見つめる。

絵夢「……お疲れ様でした」

絵夢、階段を上っていく。

大和、花束を手に立ち尽くす。

大和「映画の終わりみたいだ」

男の声「うるっせえ！」

ビクツとする大和。

酔っぱらいが騒いでいる。

大和、ため息をつく。

○マンション・リビング（朝）

大和、目覚める。

物音がする。

大和、目を向けると、ドレスを着た絵

夢がいる。

大和「あ……」

絵夢「あ、ごめん。起こした」

絵夢、ピアスを付ける。

絵夢「ピアス、取りに来た」

大和「あ、うん……」

絵夢「大和くんは？ スーツ用意できてん

の?。」

大和「うん、そこかけてる」

絵夢「そう」

絵夢、鏡の前で前髪を直す。

絵夢を見つめる大和。

○ホテル・控室

名刺交換をする人々。

マスクは付けていない。

絵夢、女性と名刺交換をする。

女性「澤田絵夢さん」

絵夢「はい」

女性「本名ですか?」

絵夢「一応、本名です」

女性「かわいらしいですね」

絵夢「いやいや……」

大和「……」

○同・宴会場

壇上に上がっている大和。

司会者「準入賞は山本大和さん、『影の向こう

側』です」

大和、賞状と花束を受け取る。

拍手が沸き起こる。

大和、ふと見ると、絵夢が拍手をしている。
いる。

× × ×

男性「おめでとうございます」

大和「ありがとうございます」

たくさんの人に囲まれる大和。

離れたところで見ている絵夢。

○居酒屋・店内（夜）

女性「えー、山本さん映像関係なんだ」

大和「はい」

男性「じゃあ今回の映画化できるじゃないですかー」

わいわい談笑する一同。

○繁華街（夜）

男性「お疲れ様でしたー」

大和「お疲れ様でした」

大和・絵夢、会釈して歩き出す。

花束を手に持つ大和。

大和「あー、飲んだな」

絵夢「おいしかったね」

大和「……今日は？　うち帰ってくんの？」

絵夢「んー」

大和「何」

絵夢「うん」

大和「うん」

○地下鉄・車内（夜）

窓の外を見つめる絵夢。

大和、絵夢の横顔を見つめる。

○住宅街（夜）

並んで歩く大和と絵夢。

大和「コンビニでも寄ってくっ？」

絵夢「んー」

大和「散々飲んだからもういい？」

絵夢「うん」

大和「そっか」

大和、立ち止まる。

絵夢「うん？」

大和、花束を差し出す。

大和「これ、いる？」

絵夢「いや、いらなけれど」

大和「あげる」

絵夢「いや大和くんのですよ。準入賞おめで

とう的なのだし」

大和「結婚しませんかな」

絵夢「……え」

大和「使い回しになっちゃうけど、結婚しま

せんかなのにこれ使えないかな」

絵夢「(半笑いで) は？」

大和「結婚しよう」

絵夢「……」

大和「結婚してください」

絵夢、うつむく。

絵夢「……ごめんなさい」

大和「え？」

絵夢「大和さんと結婚できない」

大和「え、どうして」

絵夢「私地元戻る。お母さんばあちゃんの世

話疲れたって。私が帰らないと」

大和「そんな」

大和、絵夢の顔を覗き込む。

大和「それでいいの？」

絵夢「やっぱ家族だから見捨てられない」

大和「そんな、せつかく結果残せて、これか

らじゃん。これから脚本家としてデビュー

できるかもしれないし」

絵夢、首を横に振る。

絵夢「もともとこれが最後のつもりで書いて

たし」

大和「本当にそれでいいの」

絵夢「じゃあどうすればいいの？」

大和「……」

絵夢「どっち選んだって後悔する。ただ、そ

のときに、大和くんを恨みたくない。全部
自分のせいにするから」

大和「……結婚は？」

絵夢「……しないよ」

○マンション・リビング（朝）

アラームが鳴る。

大和、目覚める。

○住宅街（朝）

フラフラ歩いている大和。

マスクを付けた人とすれ違う。

大和、マスクを付け忘れたことに気づ
き、

大和「あ……」

○映像制作会社・社内

マスクを付けた大和、入って来る。

千絵「おー、おめでどう」

大和「ありがとうございます」

千絵「やったじゃん」

大和「準入賞ですけど」

千絵「生意気言うな。なんか祝賀パーティーとかあったの？」

大和「いや、コロナ防止で今年なしで」

千絵「えー、残念。じゃあお祝いなしか。寂しいな」

大和「ええ、まあ」

○ファミレス・店内（夜）

席にしている大和と星野。

二人の間にはパーテーション。

星野「その後どうよ、映画会社から連絡来た？」

大和「何社かプロット送ったけど、反応微妙だったなー」

星野「じゃー、もうあれだ。自力で映画作るしかない」

大和「だよねえ」

星野「せっかく準入賞取れたのにそのままつてのももつたないだろ？」

大和「確かに」

星野「クラウドファンディングとかかなー」

大和「……誰か一緒に撮ってくれればな」

星野「え？ 俺誘ってる？」

大和「(笑って) うん、誘ってる」

星野「どーしよっかなあ」

○マンション・リビング(朝)

大和、目覚める。

物音がする。

大和、音がした方を向くと、絵夢の姿。

絵夢「(気づいて) あ、ごめん起こした？」

大和「絵夢……」

絵夢「荷物、取りに来た」

× × ×

スーツケースに荷物を詰める絵夢。

絵夢「映画みたいにうまくいかないね。映画

だったら次のシーンでは荷物全部なくなっ

てるのに」

大和「ノンフィクションなんで」

○同・玄関（朝）

スーツケースを持った絵夢。

絵夢「よし、これで完了。お疲れ様でした」

大和「他に持ってくものは？」

絵夢「ないよ」

大和「あつたらいつでも取りに来ていいから」

絵夢「笑って）ないよ。もうここには来ない」

大和「……本当に行くの」

絵夢「うん」

大和「書くの辞めても、一緒にいればいいん

じゃないの。俺が作る映画、一番に絵夢が

見てよ。一番そばで」

絵夢「それも考えたよ。大和くんが映画監督

で私は専業主婦でって。（笑って）養われる

前提っていうね」

大和「そういうのもいいじゃん」

絵夢「結局私が逃げたいんだ」

大和「俺から？」

絵夢「一緒にいて辛いよ。もう嫉妬するのも

焦るのも嫌になっちゃった」

大和「……どうしても一緒にいられないの」

絵夢「私たち、どっちかが書くのやめたら、

一緒にはいられないよ。初めからそうだったでしょ」

大和「無理なのかな」

絵夢「だって大和くんの書く脚本面白いんだもん」

大和「言わなくていいよ、そんなこと」

絵夢「身体に気を付けて、頑張って」

大和「……」

絵夢「身体に気を付けて、頑張って」

大和「……」

大和「……」

○マンション・リビング（朝）

大和、目覚める。

隣を見ても誰もいない。

○同・玄関（朝）

大和、靴を履き、マスクを付け、ドアを開ける。

○ファミレス・店内（夜）

大和「映画の、ことなんだけども」

星野「何？ まさかやめるとか言わないよな？」

大和「違うの、撮りたいんだ」

星野「え？」

大和「主人公がコロナの世界とコロナが無い世界を行き来するって話」

○映画館・入口前

映画のポスターが飾られている。

『山本大和初監督作品』 『2023年11月11日公開』の文字。

○同・館内

柴田「うーん。設定が甘いつついかツツコミどころ満載だよね。主人公は結局何がしたかったの？ 彼女とどうなりたかったの？」

大和「そう、つすねえ……」

柴田「まあ今の時代に着目したのは面白いポイントだったよ。ま、これからだね」

大和「はい」

柴田「お疲れ」

柴田、歩いていく。

千絵、近づいてきて、

千絵「散々言われてやんの」

大和「まあ、はい。実際これ映画祭一次落ちなんで」

千絵「ま、これからでしょ」

千絵、大和の肩を叩き、歩いていく。

大和、ため息をつく。

絵夢の声「山本さん！」

大和、声のした方を向く。

絵夢、紙袋をいくつも下げて駆け寄ってくる。

大和「あ……」

絵夢の後ろには佐々木(28)。

絵夢「面白かったです！ あ、この人夫です。

特にあの授賞式の帰り道のシーン！ 映像

もきれいだったし、一番好きでした」

大和「……見に来てくれてありがとうございます」

佐々木「初めまして。佐々木です。面白かったです」

大和「ありがとうございます」

絵夢「あ、そうだ」

絵夢、紙袋から菓子を取り出す。

絵夢「これよかったら」

大和「あ、ありがとうございます」

絵夢「東京の人に東京のお土産渡してもしか

たないか！ あはは」

佐々木、微笑む。

絵夢「いろいろ観光してたんです」

大和「そうでしたか」

絵夢「いやあ東京って楽しいですね！」

ニコニコしている絵夢。

大和「……よかったです」

絵夢「じゃあ私たちはこれで。お疲れ様でした」

佐々木「失礼します」

佐々木、会釈する。

大和「ありがとうございます」

絵夢「身体に気を付けて、頑張つて」

絵夢・佐々木、出口に向かう。

大和「――映画撮らないの？」

立ち止まる絵夢。

大和「映画、一緒に撮ってみない？」

絵夢「……コロナが落ち着いたらね」

絵夢、会釈して出口に向かう。

大和、絵夢の背中を見送る。

星野、近づいてきて、

星野「山本……。ちよつといい？ 俺の知り合

いなんだけどさー」

星野、大和の視線に気づいて、

星野「うん？ 何、知り合い？」

大和「まあ、ちよつと」

星野「なんだよ、昔の女かー？」

大和「笑つて」 違うんだよね」

【終】